

学位論文題名

Onomatopoeia in Spoken and Written English:
Corpus- and Usage-based Analysis

(英語の話し言葉・書き言葉におけるオノマトペ：コーパスと用法に基づく分析)

学位論文内容の要旨

本論文は、英語のオノマトペ、例えば pop や crash のような語彙、の研究である。オノマトペは、通常の語彙と異なり音が意味（あるいは指示対象）とある程度直接的に結びつく語彙と考えられている。欧米の言語学では、オノマトペを「言語の中心要素ではなく、数も少ない」と考えたソーシャルの影響もありオノマトペへの関心が低かった。

本論文の目的は以下の3点である。第一に、従来よりも信憑性の高いオノマトペ語彙集を作成すること、第二は、コーパスを用いて英語オノマトペの頻度別ランキングを作成し、高頻度で使われるオノマトペの文法範疇と意味を明らかにすることである。第三は、話し言葉と書き言葉とでは高頻度で使われるオノマトペの種類と文法的・意味的特徴がどのように異なるのかを明らかにすることである。

本論文の構成は以下の7章からなる。1章では、本論の目的、分析方法、使用するデータ、本論の構成が紹介される。分析方法としては、Oxford English Dictionary (以後、OED) に基づくオノマトペの特定、母語話者によるオノマトペ度判定、およびコーパス・データからの実例収集が述べられる。さらに、使用される話し言葉と書き言葉それぞれのコーパス、London-Lund Corpus (以後、LLC) と Lancaster-Oslo/Bergen Corpus (以後、LOBC) の規模と構成が紹介される。本論の構成については、2章は先行研究の紹介とその不備な点の指摘、3章は OED からのオノマトペ・リスト作成、4章は話し言葉における高頻度オノマトペのリスト作成と個々のオノマトペの分析、5章は書き言葉における高頻度のオノマトペのリスト作成および個々のオノマトペの分析となっている。

2章は先行研究の紹介をし、つぎに先行研究の不備な点として、以下の3点が挙げられている。第一に、英語オノマトペ語彙の選択の仕方が一名か二名の編者の直感に基づいており信憑性と客観性に欠けること、第二に、議論が作例に依存していて実例の分析がほとんどないこと、第三に、同一の語彙でも話し言葉と書き言葉の間には使用法に大きな違いがある可能性があるにもかかわらずその違いを考慮していない、ことである。

3章では OED の記載に基づいてオノマトペのリストを作成している。この結果、語源欄の記述から OED では英語語彙 287 語をオノマトペと認定していることが明らかになり、このうち 252 語が動詞、226 語が名詞として機能し、このうち 194 語つまり名詞として機能する語のうち 85.8%、が動詞としても名詞としても機能することを報告している。さらに副詞が 32 語、間投詞が 12 語、動

名詞が 155 語、-ing 型形容詞が 123 語、-ed 型形容詞が 78 語あることを報告している。

4 章から 6 章が本論文の主要部である。4 章では、話し言葉を集めた LLC を用いて 3 章で得られたすべてのオノマトペを頻度順にランキングしている。つぎに、5 名の英語母語話者をインフォーマントにして各々のオノマトペ度を測り、その合計点が（10 点満点のうち）8 点以上の上位 14 語を絞り込み以下の事実を報告している。話し言葉のコーパスで最も高頻度でかつオノマトペ度の高い語彙は *pop*, *dash*, *bash*, *bounce*, *tick*, *clash*, *crash*, *pat*, *bump*, *clatter*, *chatter*, *crisp*, *flap*, *jabber* である。このうち 4 語（*pop*, *bash*, *bounce*, *dash*）は「位置変化」、3 語（*crash*, *clash*, *pat*）は「衝突」、2 語（*chatter*, *jabber*）は「会話」をそれぞれ典型的に表す。また *tick* は「チェックマーク」、*bump* は「遭遇」、*crisp* は「もろい・砕けやすい状態」、*flap* は「パニックの状態」、*clatter* は「音の発散」をそれぞれ典型的に表す。

5 章では、書き言葉を集めた LOBC を用いて 3 章で得られたすべてのオノマトペを頻度順にランキングしている。つぎに、4 章と同様に各々のオノマトペ度を測り、その合計点が 8 点以上の上位 13 語を絞り込み、実例を分析している。主な分析結果は以下のものである。書き言葉の中で最も高頻度のオノマトペは *murmur*, *flap*, *mutter*, *crash*, *dash*, *clash*, *fumble*, *quiver*, *chatter*, *lash*, *bump*, *pop*, *puff* であり、このうち 4 語（*crash*, *clash*, *lash*, *bump*）は「衝突」、3 語（*murmur*, *mutter*, *chatter*）は「会話」、2 語（*dash*, *pop*）は「位置変化」をそれぞれ典型的に表す。また、*flap* は「揺れている状態」、*fumble* は「手の動き」、*quiver* は「揺れ」、*puff* は「煙の発散」をそれぞれ典型的に表す。

6 章では、4 章の話し言葉のオノマトペと 5 章の書き言葉のオノマトペの分析結果を比較し、以下の成果を報告している。第一に、話し言葉で最も高頻度で最もオノマトペらしいトップ 5 の語彙（*pop*, *bash*, *bounce*, *tick*, *clash*）は書き言葉のそれ（*murmur*, *flap*, *mutter*, *crash*, *dash*）とは全く異なる。特に書き言葉でトップ 5 に入った *murmur* と *mutter* の 2 つの語は、動詞の用法が多く、その際「引用」や「that 節」、「会話の内容を表す目的語」を伴うことが多かった。このような用法の語は、話し言葉ではトップ 5 はおろか今回調査対象としたトップ 14 の語彙にすら入らなかった。第二に、動詞用法が話し言葉・書き言葉、二つのレジスターで最も一般的に用いられるオノマトペの品詞である。話し言葉では対象である 14 語中 9 語が動詞で用いられることが最も多く、書き言葉では 13 語中 10 語が動詞で用いられることが最も多かった。第三に、動詞用法に注目すると、話し言葉では「位置変化」を、書き言葉では「衝突」を高頻度で表す語がそれぞれ最も多かった。具体的には、話し言葉では 5 つの語（*pop*, *bash*, *bounce*, *dash*, *clatter*）が動詞で用いられる際、“*pop in*,” “*bash through*,” “*bounce up and down*,” “*dash from*,” “*clatter out*” といった方向を表す語句を伴い「位置変化」を表すことが多いのに対し、書き言葉では 4 つの語（*crash*, *clash*, *lash*, *bump*）が動詞で用いられる際「衝突」を表すことが多かった。

7 章は結論として本論文の成果が要約されるとともに、本論の残された課題と類型論的研究との接点に触れている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 高 橋 英 光
副 査 教 授 小 野 芳 彦
副 査 准教授 野 村 益 寛

学 位 論 文 題 名

Onomatopoeia in Spoken and Written English: Corpus- and Usage-based Analysis

(英語の話し言葉・書き言葉におけるオノマトペ：コーパスと用法に基づく分析)

欧米の言語学では、オノマトペを「言語の中心要素ではなく、数も少ない」と考えたソシユールの影響もありオノマトペへの関心が低かった。このため現在でもオノマトペは言語学の中で最も研究の遅れた分野の一つとなっている。英語のオノマトペも英語の他の現象に比べて研究が遅れていると言える。既存の数少ないオノマトペ研究・語彙集では、実例がほとんど分析されておらず、話し言葉と書き言葉の区別にも考慮がなされてこなかった。加えて、オノマトペの収集法・認定法も研究者個人の直感に委ねられていることが多い。一方で、英語のオノマトペの文法範疇と意味特徴を詳細に調べることは、なぜオノマトペの多い言語と少ない言語があるのか、オノマトペの数の大小と文法的・意味的特徴との間に何か相関関係はあるのか、という新しい言語類型研究につながる可能性を秘めている。

本論の特筆すべき点は3点である。第一に、従来よりも信憑性の高い英語オノマトペ語彙集を作成したこと。第二は、コーパスを用いて英語オノマトペの頻度別ランキングを作成し、高頻度で使用されるオノマトペの文法範疇と意味を明らかにしたこと。第三は、従来の研究ではまったく見落とされていた話し言葉と書き言葉とでは高頻度で使われるオノマトペの種類と文法的・意味的特徴がどのように異なるのかを明らかにしたことである。

本論の具体的な成果は以下の3点に要約される。第一に、話し言葉・書き言葉ごとの高頻度のオノマトペの語彙集を作成し、かつ豊富な使用例を提示したこと。第二に、「英語オノマトペは名詞か動詞で用いられることが多い」という定説に計量的な裏付けを与えたことである。話し言葉では対象である14語中9語 (*pop, bash, bounce, crash, dash, pat, bump, clatter, jabber*) が動詞で用いられることが最も多く、書き言葉では13語中10語 (*murmur, mutter, crash, dash, fumble, quiver, chatter, bump, pop, puff*) が動詞で用いられることが最も多いことを報告している。第三として、英語の話し言葉と書き言葉とにおけるオノマトペの共通点と相違点を明確に指摘したことである。具体的に言えば、動詞では「位置変化」と「衝突」を意味する動詞が際立つことを指摘したこと、さらに、書き言葉のコーパスでトップ5に入った *murmur* と *mutter* の2つの語は用法

も独特であること、話し言葉では5つの語 (*pop, bash, bounce, dash, clatter*) が動詞で用いられる際、“*pop in,*” “*bash through,*” “*bounce up and down,*” “*dash from,*” “*clatter out*”といった方向を表す語句を伴い「位置変化」を表すことが多いのに対し、書き言葉では4つの語 (*crash, clash, lash, bump*) が動詞で用いられる際「衝突」を表すことが多かったことを明らかにしたことなどが高く評価される。

このように本論は、現在の言語学で注目されているコーパスを用いた使用依拠的な分析方法を英語オノマトペ研究に採用した初めての試みとして当該分野に大きな貢献をするものである。しかし、本論に不備がないわけではない。先行研究のオノマトペ推定法に対する吟味がやや不十分な点と、分析結果の一部はサイズの大きなコーパスによる検証が望まれることが審査委員から指摘された。さらに、本論で得られた知見が、英語の一般的特性とどのように関連するのか、という考察をする余地も残されている。しかし、これらの点は本論の今後の発展性を示唆するものであり、本論がオノマトペ研究のひとつの新しい分析モデルを提示した意義は大きい。

最後に、本論文の内容の一部はすでに日本認知言語学会などの全国学会で発表されており、一定の評価を得たものであることを付記しておく。本委員会は、申請論文を慎重に審査し、また口述試験を実施して十分に審議を重ね、全員一致して本論文が博士(文学)の学位を授与されるにふさわしいものであるとの結論に達した。